

大阪市立大学 正員 倉田 宗章
 〇明石工業高専 正員 高 端 宏 直
 大阪市立大学 正員 谷 平 勉

1. まえがき……粘弾性バネ基礎上の平板の解析についてはKerr¹⁾等によってもなされ、また紹介されている。本報告ではFreudenthal²⁾等によって線形粘弾性バネ上の梁の解析に用いられたKelvin, Maxwell, Standard solidの三種のWinkler形のModel(図-1)上の周辺自由な平板(図-2)について近似解法を示した。またTensionlessのバネについても比較検討した。バネと平板とは鉛直バネ反力のみが介在するものとし、荷重はTime-independent loadとして解析し、たわみ、バネ反力、平板の浮上りについても検討した。

2. 解析法……平板の基礎方程式にバネ反力の項を加味して、それぞれこの微分方程式を求めた。平板解析(一定時間について)は中央差分法を用い時間軸方向には初値問題としてEulerの前進差分法で差分表示した。バネ反力や曲げモーメント M_x …もたわみ $\{w\}$ で表わし(表-1)、辺長や時

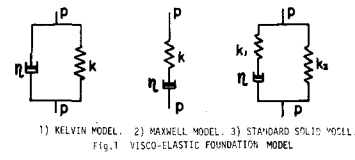


Fig. 1. VISCO-ELASTIC FOUNDATION MODEL.

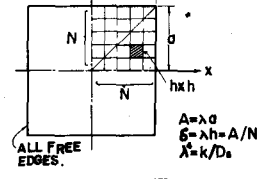


Fig. 2. DIMENSION OF THE PLATE.

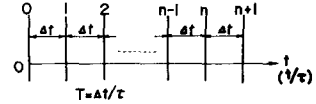


Fig. 3. TIME ABSCISSA.

表-1. 各種解式のまとめ.

Model	Kelvin	Maxwell	Standard Solid
微分方程式	$\nabla^4 w + \frac{\eta}{D_s} \frac{\partial w}{\partial t} + \frac{k}{D_s} w = \frac{q}{D_s}$	$(1 + \frac{\eta}{k} \frac{\partial}{\partial t}) \nabla^4 w + \frac{\eta}{D_s} \frac{\partial w}{\partial t} = \frac{q}{D_s}$	$D_s (\frac{1}{\tau} + (1 - \frac{\eta}{k_2 \tau}) \frac{\partial}{\partial t}) \nabla^4 w + k_2 \frac{\partial w}{\partial t} + \frac{k_2}{\tau} w = \frac{q}{\tau}$
バネ反力	$p = \eta \frac{\partial w}{\partial t} + k w$	$\frac{\partial w}{\partial t} = \frac{1}{k} \frac{\partial p}{\partial t} + \frac{1}{\eta} p$	$p_2 = k_2 w$, $p = k_1 + p_2$, $\frac{\partial p_2}{\partial t} + \frac{1}{\tau} p_2 = \frac{\eta}{k_2 \tau} \frac{\partial p}{\partial t}$, $\frac{p}{\eta} + \frac{1}{k} \frac{\partial p}{\partial t} = (1 + \frac{k_2}{k_1}) \frac{\partial w}{\partial t} + \frac{k_2}{\eta} w$
τ, τ', T	$\tau = \eta/k$, $T = \Delta t/\tau$	$\tau = \eta/k$, $T = \Delta t/\tau$	$\tau = (k_1 + k_2)/k_2 \tau' \eta$, $k_1 = k_2 = k \rightarrow \tau' = 2\tau$, $T = \Delta t/\tau'$
差分表示	たわみ $\{w_i\} = \frac{P \Delta^2}{k} (\alpha \delta + \beta \delta^{1/2}) \dots$ 等, $\bar{q}_i = \frac{P \Delta^2}{k} (\alpha \delta + \beta \delta^{1/2}) \dots$ 等, $\{w\}$	$((1 + \frac{1}{\tau}) [K] + \frac{1}{\tau} [\delta]) \{w\}^n = \{ \bar{q} \} + \frac{1}{\tau} ([K] + [\delta]) \{w\}^{n-1}$	$k_1 = k_2 = k$ $((1 + \frac{1}{\tau}) [K] + (1 + \frac{2}{\tau}) [\delta]) \{w\}^n = \{ \bar{q} \} + \frac{1}{\tau} ([K] + 2[\delta]) \{w\}^{n-1}$
	バネ反力 $\{ \frac{p}{k} \}^n = (1 + \frac{1}{\tau}) \{w\}^n - \frac{1}{\tau} \{w\}^{n-1}$	$\{ \frac{p}{k} \}^n = \frac{1}{1+T} (\{ \frac{p}{k} \}^{n-1} + \{w\}^n - \{w\}^{n-1})$	$\{ \frac{p}{k} \}^n = \frac{1}{1+T} (\{ \frac{p}{k} \}^{n-1} - 2\{w\}^{n-1}) + \frac{2+T}{1+T} \{w\}^n$
初期条件	$t=0, n=0 : \{w\}^n = 0$	$t=0 : \{w\}^n = \{w\}^{winkler}$, $n=0 : \{ \frac{p}{k} \}^n = \{w\}^{winkler}$	$k_1 = k_2 = k : \{w\}^n = \{w\}^{winkler}/2$, $h=0 : \{ \frac{p}{k} \}^n = \{w\}^{winkler}$

注. $\{w\}^{winkler}$: $\eta=0$ の従来のWinklerバネの場合のたわみ量。 曲げモーメント式 M_x, M_y, M_{xy} は省略する。

〔使用記号〕 D_s : 板剛度, λ : 長さを実次元化するための量 ($=\sqrt{k/D_s}$ (1/cm)), η, δ : 介格長と無次元介格長, a, A : 半辺長と無次元半辺長 ($=\lambda a$), N : 分割数, P, q : 集中荷重(kg)と等分布荷重(kg/cm²), \bar{q} : 格点荷重強度(kg/cm²), α : 荷重比 ($=q/P \Delta^2$), β : 集中荷重の位置による係数, δ : ($=\delta^4 = (A/N)^4$), $p, \{p\}$: バネ反力(kg/cm²)と反力ベクトル, k, k_1, k_2 : バネ定数(kg/cm³), η : バネの粘性係数(kg/cm³t), t : 時間, τ : 遅延および弛緩時間 ($=\eta/k$), $\Delta t, T$: 介格時間間隔と無次元化したもの ($=\Delta t/\tau$), $[K]$: 差分表示のための係数マトリックス, $[\delta]$: δ を要素とする主対角マトリックス, $w, \{w\}$: たわみとたわみベクトル。

面は無次元化して表わした。質の反力を考えない場合については文献(3)にも示した逐次近似解法によった。(フローチャートは省略する。)

3. 数値計算例...ここでは図-1,3)のバネ定数は $k_1=k_2=k$ とし、初期条件は表-1に示した(図-3参照)。本例では計算機の都合で $N=8$ とし、曲げモーメントの計算も省略した。図-4は各バネモデルについて、平板の中央点に集中荷重 P が作用した場合 ($\alpha=0, \beta=1.0$) で $T=0.3$ と $D=1.0, 3.0$ の2つについて載

荷重下のたわみと地盤反力について描いた。各モデルの特性が表わされていゝる。いずれも tensionless の場合である。図-5,6,7は中央集中荷重載荷で $T=0.3, D=3.0$ の場合について、板の対角線上のたわみとバネ反力を $\psi/\tau=0$ から 6.0 まで描いたものである。破線はバネの tension を考えた場合である。Kelvin形の場合はたわみやバネ反力は Winkler 形の場合の値に収束する。Maxwell形の場合はたわみは線形的に時間と共に増大し発散するが、バネ反力は一定値に収束する傾向にある。Standard Solid 形の場合もたわみやバネ反力は収束するが、バネ反力の大きな変化はみられない。図-8は分格時周間隔 T を $0.1, 0.3, 0.5$ と変化させた場合 (Standard Solid 形で中央集中荷重載荷で中央点のたわみ量を示す。)を示した。途中は T によりやゝ差異がみられるが、 ψ/τ が大きくなると同じように収束しているようである。初期値問題については更に検討の必要がある。図-9は各タイプの $\psi/\tau=3.0$ で $\bar{u}=0$ (ここでは $\beta=1.0$) と除荷した場合である。 $\psi/\tau=3.0$ 近傍での問題は別として、傾向としてはいずれも除荷後 0 に収束している。載荷状態はいままでと同じで、tension を考慮した場合である。図-8と同様板中央点のたわみを示した。

4. おさび...以上、粘弾性モデルについてのべたが、たわみ、バネ反力ともそれぞれ特性が表われていた。tensionless の場合と比較して、中央点近傍のたわみやバネ反力は大きな差はないが、周辺部の湾上りの状況には大きな差異がみられるようである。精度については比較検討しにくい。分割数 N の増加、時間方向の差分表示を検討すれば、実用上からは十分な精度をうるものと考えられる。

今後、曲げモーメントの検討、分割数の拡張、初期値問題の再検討、バネ基礎が非線形化した場合についても調べる予定である。

以上。

[参考文献] 1) A.D.Kerr: Elastic and Viscoelastic Foundation Models, Jour. of Applied Mechanics, Trans. of the A.S.M.E., Sep.1964
 2) A.M.Freudenthal, H.G.Lorsch: The Infinite Elastic Beam on a Linear Viscoelastic Foundation, Proc. of A.S.C.E. EM1, Jan, 1957.
 3) 倉田, 高橋, 谷平: 非線形バネ基礎上の周辺自由な平板の数値解析. 土木学会論文報告集, 208号, 1972.

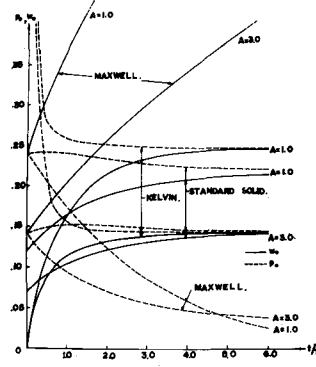


FIG. 4 M_0 AND P_0 CURVES ABOUT EVERY TENSIONLESS FOUNDATION. COEFF: P_0/μ ($\mu=1$), P_0/μ ($\mu=1$)
 $N=8, \beta=1.0, \alpha=0, T=0.3$.

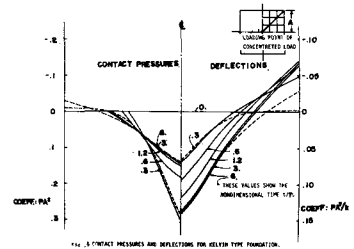


FIG. 5 CONTACT PRESSURES AND DEFLECTIONS FOR KELVIN TYPE FOUNDATION. (A=3.0, B=10.0, C=0.0, D=0.0, T=0.3. COEFF: P_0/μ) (DOTTED LINES SHOW THE CASE OF THE FOUNDATION WITH TENSION.)

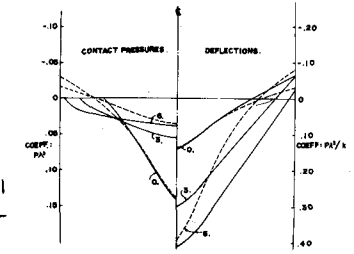


FIG. 6 CONTACT PRESSURES AND DEFLECTIONS FOR MAXWELL TYPE FOUNDATION. (A=3.0, B=10.0, C=0.0, D=0.0, T=0.3)

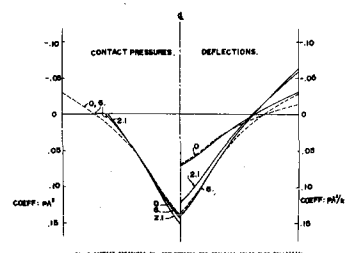


FIG. 7 CONTACT PRESSURES AND DEFLECTIONS FOR STANDARD SOLID TYPE FOUNDATION. (A=3.0, B=10.0, C=0.0, D=0.0, T=0.3)

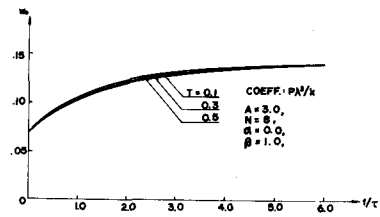


FIG. 8 RELATIONSHIP BETWEEN u_0 (DEFLECTION AT PLATE CENTER) AND (DIMENSIONAL) TIME INTERVAL, IN THE CASE OF TENSIONLESS STANDARD SOLID TYPE FOUNDATION.

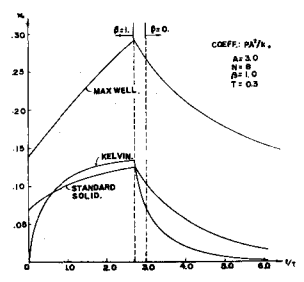


FIG. 9 RELATIONSHIP BETWEEN u_0 AND u_1 IN THE CASE OF HORIZONTAL.